

西田哲学学会会報

第十八号

題字 上田閑照

発行・西田哲学学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(076)2836600

会長挨拶・・コロナ状況下での学会運営を通して

秋 富 克 哉

二〇一九年七月、西田縁の地・鎌倉は鎌倉女子大学での第十七回学術大会の初日、私は会長挨拶のなか、前の月に亡くなられた上田閑照先生のことに触れ、そして最後を「来年は西田幾多郎記念哲学館でお目にかかりませう」と締め括った。翌日には、西田が後年を過ごした稲村ヶ崎の寸心荘を訪問、個人的には久しぶり念願が成就した余韻に浸りながら、奇しくも大会は終焉の地から誕生の地に移るのなどと、今となつては悠長なことを考えていた。

大会後は、その準備に向かうべく、哲学館での大会時に同時開催される恒例の国際シンポジウムのプログラムやゲストについて、幹事会や事務局と相談を

進めていった。当面最大の懸案は、東京オリンピック・パラリンピック開催による都心部からの交通事情や宿泊事情はどうなるかといったことだったように思う。

その後、年明け以降の事の推移は、改めて記すまでもないであろう。コロナ禍の文字通り想定外の拡大に、春先より七月開催の可能性が次第に危惧されていくなか、国内外のゲストや会員への通知時期のデッドラインを睨みながら、オリンピック・パラリンピック開催の判断を参考にすることも検討した。

一方、私を含めた理事や幹事の関係している諸学会が延期を決定したりオンライン開催に切り替えたりといった情報が入る

なか、延期の可能性を探るため、全ゲストと参加予定者の都合や哲学館の使用予定などを確認すると同時に、役員の方々が所属大学等でオンライン対応に苦しみつつも次第にそのノウハウを蓄積していくことに手応えを感じながら、オンライン開催の検討も始めていった。

何とか十二月の日程を確保して延期を決定したものの、国際シンポジウムに向けて招聘を予定していた海外ゲストの拠点ドイツイとアメリカは、共に感染状況が日本の比ではないことから、国際シンポジウムの方はやむなく開催を断念。年次大会のみに絞つてからも、十二月なら対面式でも何とかなるのではないかと、哲学

館で秋以降の講演会が人数制限のもと再開されるとの報告に勇気づけられ、しかし、半日の講演会と二日間の学会では事情が異なることを踏まえないわけにいかず、結局プログラムを縮小してのオンライン開催に踏み切る以外になかった。お二人の公開講演の先生には、二度の変更により多大なご迷惑をおかけしたが、ご理解いただいたことに感謝の思いしかない。

オンラインでの大会開催が決まってきたから幹事会の大車輪の健闘ぶりは目覚ましく、傍で見えてただただ頼もしかった。プログラムの再編成は言うまでもなく、先述のように、この間幹事諸氏がそれぞれの持ち場で獲得したオンライン技術で、種々の課題に対応してくれた。もちろん、連絡の要となつて種々のサポートを提供してくれたのは哲学館の事務局であり、当日を含め幹事の仕事を補助してくれた若手会員の存在も有り

難かった。

そして、オンライン発表への変更に対応して下さった応募発表者とシンポジウムのパネラー、さらにそれぞれの司会担当の方々には、予めのオンライン接続試験にもご協力をいただき、これら全ての方々、この場をお借りして、心よりお礼を申し上げたいと思う。

このように周到な用意をもつて大会に臨んだが、それでも、何が起ころかわからないのがネットシステムの常である。しかし、いざ蓋を開けてみると、最初の「善の研究」講読」から最後のシンポジウム「霊性」まで、全国各地のみならず海外からも入れ替わり立ち替わり常時五十名前後の参加があり、私が確認できた限りでは、最も多い時で六十名を超えるアクセスがあった。先方の接続不良によつてこなせないプログラムが出たのは返す返す残念であり、また若干の音声トラブルもあつたが、特に目立った事故はなく、二日間首尾よく進み、充実した大会を終えることができた。多くの会員の協力によつて、本会にオンライン大会の実施という歴史が刻まれたことは本当に喜ばしく、貴重な共有財産になつ

たと思う。

ところで、改めて思うのは、これは本会の大会運営に限ったことではないのだが、もし今のコロナ感染がたとえば十年前、あるいは二十年前に起きていたらどうなっていたかということである。詳細を確認しようも実証のしようもないが、この間日々進歩してきたネット技術により、対面式の大会実施が不可能になってもオンラインで国

パンデミックと西田哲学(会)

——第十八回年次大会報告に添えて

二〇二〇年は全世界で新型コロナウイルス(COVID-19)が猛威を奮い始めた年であった。この原稿を書いている翌年一月三十一日現在も収束の兆しは見えない。現在、感染者は世界中で約一億人、日本で約三十九万人、死者は世界で約二百二十万人、日本で五六八六六人である。日本でも、病床が不足し必要な入院ができない医療崩壊が起こり、非正規雇用をはじめ多くの人が職を失い、飲食店等の個人事業主、介護や保育のエッセンシャルワーカー、芸術関係の

内外が結ばれ、一定の制約はあるものの、学術交流が可能になるという現実。しかも、ふだんの対面式では参加の叶わない会員の名前が参加者リストに掲示され、私自身、大会後個人向けチャットを送って挨拶を交わせた会員もいた。要は、既に潜在的に巨大化していたネット技術の威力が、コロナ禍の拡大によって一気に顕在化したということであり、この傾向は今後さ

人々などの暮らしが追い詰められている。またテレワークの導入とともに、私たちの世界のデジタル技術への依存は強まり、できるだけ互いが近寄らない、顔を直接に合わせない生活に変わった。

西田幾多郎は、小さな自我を消して事柄に打ち込む「純粹経験」を通じた「人格」の開花や、互いの違いを踏まえながら応答し承認し合う「私と汝」の関係性を倫理として説いたが、パンデミック以後に目立つのは、人格の開花以前に生活を追われ孤立

らに拍車がかかることになるだろう。今後の予測がなおも立たない中、今はともかく、一刻も早い収束を望む以外にない。ただ、その収束に向かう時、あるいは収束が実現した時、私たちの世界はどのようなものになっているだろうか。既に四ヶ月後に迫った次回大会に向けて準備を進めつつ、真剣に向き合わないならばならない問いである。

太田裕信

感を強める人々の存在であり、自粛警察などに典型的に見られるように、人様に迷惑をかけるようにと恐々とする「世間的空気」の著しい支配と、パンデミック以前からある「自己責任」という言葉を用いた困窮者への無関心・突き放しであるように思われる。

学界・教育界に目を転じると、教育現場ではインターネットを介した「遠隔授業」が推奨された。通学したことはほとんどなく、友人もできず、教員の顔も何人かしか知らないという新人

生も全国的に多いようである。また多くの学会において「オンライン大会」が開催された。本学会の二〇二〇年次大会も、当初は石川県西田幾多郎記念哲学館でかほく市主催の国際シンポジウムと併せて七月下旬に華々しく開催されるはずだったが、十二月十二、十三日に延期され、さらにZoomというビデオ会議ツールを通じたオンライン開催を余儀なくされた。事前準備および当日の運営にあたっては、哲学館のスタッフや幹事会が担った。

例年、本会報では公募の研究発表と招待講演を中心に報告する「年次大会報告」という記事がもうけられている。しかし、今回は招待講演が中止となり紙幅が余ることになることから、編集委員会からの要望を受けて、以下では簡単な研究発表報告に添えて「パンデミックを前に西田なら何を言うか」という随想・愚見を綴ることをどうかお許しいただきたい。

【年次大会報告】

本年次大会には、両日継続して、約四〇名強から五〇名強の参加があった。一日目、十二日(土)の午前には、恒例の『善

の研究』講読(入門講座)、午後は秋富克哉会長の挨拶、総会、二〇二〇年に西田幾多郎記念哲学館の編集により新版『西田幾多郎全集』の別巻として出版された『西田幾多郎未公開ノート』に関する報告を経て、目玉のシンポジウム(テーマは「靈性」)が開催された。さらに一日目、十三日(日)は計六名の研究発表が予定されていたが、後述のトラブルのため計五名の発表があった。講読およびシンポジウムは別枠で報告があるため、ここでは研究発表の報告と、今後の年次大会の見通しを簡単に記しておきたい。

最初の研究発表は服部圭祐氏(神戸医療福祉大学)の『善の研究』と日本の哲学における「形而上学」の伝統であった。『善の研究』が井上哲次郎の「現象即实在論」という明治期の「形而上学」志向を受け継ぐとともに、はつきりと「認識論」的側面をもつことにおいて新たな意味をもったものだと言じられる。

次に高橋勝幸氏の発表「東西思想の桎梏——西田哲学から包摂の道を探る」がなされた。氏は「もの」ロゴスの論理」的な西洋文化に対して、東洋・日本

文化には「こと=レンマ的論理」と呼ぶものがあり、この東西の思考の対話のために有意義なのが西田哲学であるとされた。

本来ならば、この後 Steve Lotts 氏(ウェスタンオンタリオ大学)の発表 Dögen, Mishida, Heidegger : ni (有時), Basho (場所), and Ort がなされるはずであったが、通信環境に関する止むを得ない理由のため、残念ながら急遽辞退となった。オンライン大会にはこうした不慮の事態があるという教訓となった。

午後の部のトップバッターは上田光治氏(広島大学)の「西田哲学における「重ね合わせ」の意味するところとその発展」であった。論文「場所」にみられる「重なり合ふ」という言葉の意味を手がかりに、西田の場所論の考察が試みられた。

次に山本舜氏(京都大学)の「『自覚に於ける直観と反省』と初期田辺の数理哲学」という発表が行われた。氏によれば『自覚』は自然数や実数の基礎付けの可能性を含んでおり、その思想内容と意義は田辺との交流から明らかにしうる。

最後に眞田航氏(大阪大学)の「後期西田における「絶対否

定の弁証法」——ヘーゲル批判の分析から」がなされた。氏は、西田がヘーゲルの弁証法を「有機体」的と理解し批判していることに着目する。これに対して、

西田の弁証法は、むしろ「外的な感覺的實在」と自己との「絶対否定の弁証法」という性格をもつものだとされた。質疑の時間に、長時間の通信によるPCへの高負荷のためか、発表者の音声・映像が途切れるというトラブルがあったが、発表者・司会・ホスト側ともに冷静に対応し、議論を終えることができた。

ホスト側(本部や事務局)の尽力もあり、西田哲学会初のオンライン大会は、いくつかのトラブルを除き無事に終了した。初めてではあったが、オンライン大会のメリット、デメリットも比較的明瞭だったように思われる。メリットとしては、大会のオンライン化により、空間的

距離や経済的余裕の観点からこれまで参加を断念していた多くの人々が参加できたことである。しかし、学会の大会というものは実際に顔を合わせ同じ空気を呼吸して議論し(また懇親会に出席して)会員同士の親交を深めるのが醍醐味である。オンライン大会を通じて、かえつ

てそのような同じ場を共有することの愛おしさを多くの人が感じたのではないかと思う。そのため技術的な準備の問題が出てくるが、オンラインと対面のハイブリッド開催の声がすでにいくらか出ている。本学会に限ったことではないが、今後の学会運営は多かれ少なかれ、そのような開催方式に変わっていくように思われる。

【西田ならパンデミックを前に何を言うか】

西田哲学学会会員はそれぞれこのパンデミックに関して思いをめぐらせていることであろう。最後に「このようなパンデミックに遭遇した現代世界を、われら哲学者・西田幾多郎が見たら何を言うのだろうか」と考え、その愚見を記すことをお許しいただきたい。

新型コロナウィルスの起源は定かではないが、パンデミックはグローバルイズムによって飛躍的に急増した人々の移動によってもたらされたことは明白である。このパンデミックとの因果関係はわからないが、日本でも近年のスーパー台風や本年一月の北陸地方でのドカ雪に見られるように、「気候変動」は一

般的な日本人にも感じられるようになってきている。また、パンデミックで特に大きく苦しむことになっているのは、非正規雇用の人々や貧しい国の人々である。こうしたパンデミックや気候変動、経済格差はすべてグローバルな資本主義を根本的な背景として異なるに違いない。ハイ

デガーが「総かり立て体制(Gesamtheit)」と名付けたように、現代の資本主義に基づく科学技術世界は、一方で先進国に私たちに便利な物と生活をもたらしながら、他方で人間も自然も含めあらゆるものを何か役立つ物、いやもっと正確に言えば利潤を産むものとして見なし、自然環境を破壊し、南北格差と国内の経済格差を広げていく。

西田は後年の論文「人間的存在」(一九三九、『哲学論文集第三』所収)で、近代という時代は、人間と自然が対立し人間が神となった「人間中心の主観主義」の時代であり、それに基づく「科学工業の発展」は「資本主義的世界を構成し」、「国内においての階級闘争と国家間においての国際軋轢」を生じたと言う。

それに対して、西田は、そうした人間中心主義を克服して、新たな「歴史的制作的人間主義

というものへの「転換」の必要性を説いている。「哲学論文集第四補遺」(一九四四)では、その「転換」によって、世界は「帝国主義と搾取主義」、「階級闘争」と「民族闘争」を超えて、それぞれの民族が「各自独立的なるもの」として「一つとして結合する」という。

私は、西田ならば、パンデミックを前にして、今こそこうした「歴史的制作的人間主義」への「転換」がなければならぬ、すなわち人間の根本的世界観と社会システムの変革がなければならないと説いたのではないかと思う。

なるほど西田の説明は抽象論である。また勿論ソ連や中国などの共産主義を理念としているわけではない。ただし、西田の「歴史的制作的人間主義」は、単なる経済成長への信仰に基づいた現代世界と別の世界を志向しており、現代においてなお実現されていないものだとさえいえる。というのも、私たちの現代世界も第三世界から多くの労働力と資源を搾取して成り立ち(帝国主義・搾取主義)、またどこの国の内部でも格差は広がり(見えにくい仕方での階級闘争)、各国では右傾化が顕著

だからである(民族闘争)。さらに西田の死後である第二次世界大戦以降、人類は飛躍的な経済成長を遂げ、人口、エネルギー消費、二酸化炭素の排出量などは加率的に増え、地球環境に大きな負荷を与えている(近年では「人新世」という概念が用いられる)。現代でも、西田がいう「転換」はまったくなされていないどころか、帝国主義や階級闘争・民族闘争は、大戦下の直接的形態とは別の仕方であり、つまりグローバルな資本主義という隠微な形で続いていると言えるのではないだろうか。

哲学者は必ずしも時事的な問題に飛びつかねばならないというわけではないように思える。堅実な文献研究が、現代問題の思索と称する早計なものよりも遙かに深く有意義な場合も多いかもしれない。けれども、時に哲学にはその時代の本質を深く捉

えることも求められる。西田も時代と格闘しながら哲学をした。晩年の「場所的論理と宗教的世界観」(一九四五)によれば(もとより西田に必ず賛同しなればならないことはないけれども)、この現実の「世界に沈心して、その歴史的課題を把握するのが、真の哲学者の任」のようである。私たち西田哲学学会員は、西田哲学の遺産を継承し新たに思考を紡ぐ者たちとして、単に西田研究のための西田研究に墮してしまおうのではなく、西田の現代的可能性をつかみ世の中に伝えていくという課題をもつ。パンデミックを前にして、西田哲学学会がさらに盛り上がり、地味な哲学研究が現実世界の理解と変革に繋がっていくことを期待するとともに、私自身も一会員として微力ながらそれに向けて努力していきたいと思う。

シンポジウム報告

「靈性」

大熊 玄

例年、大会二日目の午後開催されたシンポジウムは、今回は夏の大会が十二月に延期

されオンライン開催となったため、初日の講演会が中止となり、その時間帯に実施された。今回

のテーマ「靈性」には、西田幾多郎と同じく生誕百五十年である鈴木大拙が意識されている。西田と大拙に関しては、二〇一四年の第十二回年次大会にて、既に「西田幾多郎と鈴木大拙」をテーマとしてシンポジウムが行われていたが、故上田閑照初代会長による、この二人をテーマとするシンポジウムは一回ではすまない、という生前の言葉もあり、今回は、二人の哲学・思想をつなぐ「靈性」を特に取り上げることとなった。

提題者は、白井雅人氏(立正大学)と飯島孝良氏(親鸞仏教センター)である。白井氏は西田哲学会理事であり、ご存じの方も多いであろう。同氏には、絶対者の「許し」と「裁き」という視点から「靈性」へとつながる提題をしていただいた。飯島氏は、西田哲学学会会員ではないが、一休を中心に禅思想についての研究があり、大拙の「靈覚」についての発表もあることから提題者としてお招きした。お二人とも新進気鋭の研究者である。

最初に白井雅人氏が、「裁きと赦し——絶対者と自己の関係をめぐる」というテーマで提題をおこなった。白井氏は、ま

ず西田の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」における「靈性」という言葉の使用が大拙に基づくこと、西田においても「靈性」は重要な概念であることを指摘する。宗教論冒頭の「宗教は心霊上の事實である」という言葉自体が、まさに大拙の「靈性」と響き合っているという。

そして「靈性」は「行為的直観」とも深く関わっている。「行為的直観」は、「意識的な自己を越えた自己、そのような自己の立場から物を見ること」であり、西田は、このような自己があることを「自覚的事実」として、その後に「鈴木大拙は之を靈性と云ふ」としている。また、西田が「宗教的信仰」を、「客観的事実」「自己に絶対的事実」でなければならぬとしたうえで、これを「大拙の所謂靈性的事実である」としている箇所も挙げられ、西田が語る「靈性」を問題とするには、「自覚的事実」および「絶対性」が考察されなければならない。「自覚」や「絶対性」の考察へと進んだ。

「自覚」は、西田の宗教論において物質的世界・生物的世界と異なり、歴史的世界に特徴的なものとされる。歴史的世界に生きる生命は、自己と環境の相

相互作用によって生じる変化の方向を自覚しながら行動する。つまり、その方向性・目的を知っているという点で「自覚的」であるとされる。こうした歴史的な世界における自己は、環境と相互に影響を与えられながら、単に過去(原因)や未来(目的)に従属することなく、世界の方角性を自覚しつつ、過去と未来の自己の課題を主体的に引き受け、世界を形成し表現をしている。

ただし、西田によれば、こうした「自覚」が成り立つには、永遠の否定に面すること、永遠の死を知ることによらねばならない。この「永遠の死を知る」とは、対象的に自らの死を知るのでなく、まさにこの自己の「一度のなること」を知るという意味で、「自覚」といえる。

この自己の永遠の死を自覚することを、西田は「我々の自己が絶対無限なるもの、即ち絶対者に對する時であらう」と言う。そして、「自己の永遠の死を知るものは、永遠の死を越えたものでなければならぬ、永遠に生きるものでなければならぬ」と言い、この永遠の死と生の矛盾に、我々の自己の存在があり、これを西田は「宗教の心

「靈的事実」という。このような永遠の生と死の矛盾的なあり方としての「心靈的事実」は、相対的な自己と絶対者の関係において成り立ち、その関係性のある方として、絶対者による「裁き」と「赦し」があり得る。

西田が「絶対と云へば、云ふまでもなく、對を絶したことである。併し單に對を絶したものは、何物でもない、單なる無に過ぎない」と言い、「絶対は、無に對することによつて、眞の絶対であるのである。絶対の無に對することによつて絶対の有であるのである」と言うように、絶対者は、絶対の無と對することによつて、絶対の有として神の働きを持つ。言い換えれば、絶対者は、外に對するものをもたず、自己の内に絶対的な自己否定を含み、自己を絶対的に無化することにより、相對へと下る。これが神の愛とされる。

この神の愛(自己無化)は、我々相對的な自己の善惡を越え、我々への呼び声・啓示としてはたらく、それによつて我々が「信に入る」ことによつて、その「惡」は赦され、相對的な命が死に、神の永遠の命に与ることになる。一方そうした「信に入る」ことがなければ裁かれ、

「永遠に地獄の火に投ぜられる」という。

我々相對的自己は、神の自己否定によつて成立しているため、根本的事実として罪惡的な存在であるという点で、西田はキリスト教における「惡魔的」人間觀・世界觀を肯定的にとらえており、仏教における「迷い」を根源とした人間の根本的罪惡性に類似性を見て、両者に絶対者の自己否定を見ている。キリスト教においては、神の裁きを受け入れていながら、そこには神の愛に包まれ赦されているとも言え、仏教においては、愛(慈悲)に包まれ赦されていないが、そこに責任や義務が生じている。このように裁きと赦しは、絶対者と相對的自己において切り離されてはいない。

西田は、キリスト教において現れる裁きの言葉、仏教において現れる赦しの言葉の特徴を述べるが、それらが二つの方向に隔絶してしまえば、相對的なものになつてしまう。神は、絕對的に自己同一的でありつつも、相對的な自己である我々へと臨んで来る。我々は、歴史的世界に生きる自覺的自己であり、その歴史的問題を自覺し引き受けらるには、そうした絶対者の言葉

(表現)が呼び声となることと可能となる、という。

最後に、神学者ヘッセルの言葉や西田の因習的仏教への苦言も紹介され、またあらためて「靈性」を、神の言葉によつて我々の自己が転換していくという事態と規定しつつ、現実のこの歴史的世界における宗教のあり方について提言がなされた。

続いて、飯島孝良氏が「大拙の禪学における「靈覚」——「矛盾的自己」をめぐる問いとして」というテーマで提題を行った。

飯島氏は、まず提題の出発点として、大拙の『靈性的日本の建設』(一九四六)の一節を取り上げ、なぜ大拙が「靈性」ではなく「靈覚」としたのかの問いを發した。大拙は、「日本の靈性」というだけでは「十分ならぬところがあるのに気がついて」、あらためて「日本の靈性的自覚」とした、という。つまり、我々が生きていく上での「矛盾」の解決や、一切が自主的に動く世界について考えるうえで、単に「靈性」ではなく、「靈性的自覚(靈覚)」という概念の必要性を述べたのである。

また大拙は「罪業は此身につきものである。吾等が此に生を

享けたと云ふことが罪業である。靈覚を離れて居る限り、吾等は何れも罪の存在である。業繋に喘がなくてはならぬ」と言う。こうした、人間の二元性・合理性では解き明かせぬ「人生苦」＝「業繋苦」を問題とするとき、大拙にとつての「靈覚」の意味が考察される。

『仏教の大意』(一九四六)によれば、「業が人間の生命そのものだとすれば、業を免がれると云ふことは死すると云ふ義に外ならぬ」のだが、しかし、そうした「業繋苦からの解脱がないと靈性的生活はない」という。あるいは「如何に罪惡深重の間でも永遠に地獄の火に焼かれて居るべきではない」として、「人間の自覚はただそれだけの自覚ではありません。自覚のうちに靈性的なものがある」と言う。このような自覚を前提とした「靈性的なもの」がないと、「業繋苦」自体の意味がなくなる。また、逆に言えば「業繋苦」があるからこそ、「靈性的自覚(離業苦)」があるとされる。

同じく『仏教の大意』における「即非の論理」の説明として、大拙は「山を山と認覚するとき、既に山の山でないことを認覚してゐるのです。即が非で非が即

であります」と述べ、「靈覚」と「業繋苦」の関連として、続けて「業にくくられて居ると云ふとき既に業を離れて居るのである。これが靈性的直覚です」と述べる。ここでは、人間存在にある「業繋苦」と「靈性」とが矛盾的に表裏一体の「即非」的な在り方となっている。

また大拙は、百丈懷海の「不昧因果」を挙げて「因果を自分の外に見ないで自分と因果とを一つものにして」と言い、また「人間として生活してゐる限り、業はつきものである。修行の有無、悟道の如何などによりて、因果が外に離れるべき性質のものではない」と説明していることが紹介され、それを踏まえて、「分別／無分別」の構造が對照的な用語(「知性・感性／靈性」業／無業)などによつて整理された。

大拙によれば、人間は生きていく限り業苦の中におり、そこから知性(分別)によつて脱却しようとしても、その分別的循環からは逃れることができないため、非合理的な經驗事實をあつかう必要がある。ただし大拙は、分別智は分別智を克服する機会を喚び起し、また「無分別」的在り方を自覺するうえで、言

語を通して分析的に捉えなおそうとする「分別」にも我々に資するところはある、とも述べているという。

飯島氏は、このような「即非の論理」の二項相補的な構造を踏まえたうえで、大拙の思想的な基軸が日本の仏教を「即非」的に捉えることであり、大拙はそれを「靈覚」としたと考察する。この「靈覚」とは、分別的な苦悩を乗り越えるのに必要とされる宗教的経験であり、知性的分別や合理性によつては受容しきれない矛盾を看るといふことでもある。

このような「即非」の二項の相補的構造は『禅思想史研究第一』では、「悟り」と「悟る」という点で説かれる。「悟る」は、個人意識の上の心理的な出来事であり、「悟り」は、普遍性をもった哲学的一般性のある真実とされる。大拙は、公案禅の技術を「悟る」の心理に充てられたものとし、「悟りを悟る」契機がもたらされたと指摘する。この「悟りは、悟りでない(悟るから)、悟りである」という即非の構造は、心理的・動的な体験としての「悟る」が、理念的・静的な「悟り」を否定してこそ、本質としての「悟り」が

実現する構造となる。そして青原惟信の一句、即非の円環構造が述べられ、その「本来性/現実態」の構造が、「悟り/悟る」「体/用」「靈性/業繋苦(人間苦)」などと整理された。これら二項は、片方では自足できない相補的で動的事態を表している。大拙はこれを理念的・静的な「靈性」という概念ではなく、経験的・動的な概念である「靈覚」で定義しなおそうとしたのである。

西田哲学との比較考察として、「超越」を前にした「人間苦」と罪意識がどのように捉えられたかが論じられた。大拙が述べた人間の逃れられない「業繋苦」は、西田の宗教論においても「人間の根柢に墮罪を考へると云ふこと」と語られた。キリスト教においても、真宗においても、「人間の生命の根本的事実」は、「罪悪」あるいは「迷」である。このような業苦や罪悪が自力のみでは脱却不可能なこともまた、大拙・西田に共通している。西田は、大拙の「般若即非の論理」を宗教論で取り上げ、禪的用語「全体作用」「平常底」「見性成仏」を参照して、「分別と無分別の自己同一」的な在り方を表している。大拙も禅宗やバ

ウロの言葉を挙げながら、仏教やキリスト教の宗教体験に通底するものを探っていた。西田は、「自己の永遠の死」を知ることこそ「自己存在の根本的理由」であると述べ、大拙は、人間苦という矛盾がそのまま極まることで現れる「靈覚(靈性的自覚)」を述べた。ここに、二人の大きな交点が成していると考察された。最後に、禅学者・市川白弦

『善の研究』 講読報告

の「風流ならざる処」の自覚こそ不可欠だという問題意識が紹介され、現代的な問題提起がなされた。

で、自由に読むことの重要性を参加者に向けて訴えた。講読会の議論が、より開かれさらに活発となるためには必要な視点であろう。

恒例の入門講座である『善の研究』講読は、大会第一日目の午前中に行われた。今回の講読箇所は、第二編・第七章「実在の分化発展」であり、前年度の第二編・第六章を引き継ぐかたちとなった。ここ数年、第二編「実在」の講読が行われている。森野雄介(金沢学院大学)が前半の第一段落から第三段落までを、竹花洋佑(大谷大学)が後半の第四段落から第六段落までを担当した。

に解説を行っていった。講読会にはじめて参加され、『善の研究』にまだそれほど馴染みが無い参加者をふまえてのことである。『善の研究』の受け止められ方という話題ではお馴染みの倉田百三に加えて、『善の研究』との関係ではほとんど言及されることのない中原中也の西田解釈が紹介されていたのが印象的であったが、時間の都合上立ち入った解説はなされなかった。その点は惜しまれることである。倉田や中原の事例を通して、客観的かつ厳密に読むだけではなく、自らの思索にインスピレーションをもたらすかたち

今回の講読箇所の内容を担当者がどのように解説し、どのような質疑応答がなされたのかを報告する前に、第二編・第七章の西田の議論を簡単にまとめておくことにしよう。もはや言うまでもないことではあるが、「意識現象が唯一の実在である」というのが西田の『善の研究』の根本テーゼである。あらゆる事象を「意識現象」という場面に立ち返って語り直すというのがこの書の西田の基本戦略といつてよい。言語ないしは「思慮分別」を背景として、整理され秩序づけられた世界のあり方と、それに対する私の関わり方とが真の実在ではない「人工的仮定」として否定・解体され、「純粹経験」とも呼ばれる直接的で現存的な意識が唯一の実在のあり方であることが主張される。しかしながら、真実在ならぬものとみなされる区別の相がそれなりのリアリティーをもっていることも偽らざる事実であろう。したがって、この実在のこの側面を「純粹経験」の側から積極

的に説明する必要性が生じることになる。すなわち、「唯一の实在より如何にして種々の差別的対立が生ずるか」という問題である。第二編・第七章の議論はこの問いをめぐって展開されていくことになる。

この問題に対する西田の答えは、第七章の表題にもあるように、様々な区別や対立は「实在の分化発展」として理解される、というものとなる。「实在は一つに統一せられて居ると共に对立を含んでいなければならぬ」と述べた上で、西田は次のように言う。「ここに一つの实在があれば必ずこれに対する他の实在がある。而してかくこの二つの物が相対立するには、必ずこの二つの物が独立の实在ではなくて、統一せられたるものでなければならぬ、即ち一つの实在の分化発展でなければならぬ」。

このような「实在の根本的方式」から、〈主観—客観〉、〈能動—所動〉、〈無意識—意識〉、〈現象—本体〉の区別が説明されることになる。

第七章の前半を担当した森野氏は、「实在の根本的方式」としての「分化発展」を次のように噛み砕いて説明した。一個の自分のスタンスが出来上がる

と、それと対立するスタンスが見えるようになるように、一個の实在が出来上がることは、対立の中に巻き込まれることでもある。しかし、その対立に巻き込まれる中で、壁に打ち当たって悩んだりすると、それまでとは違うスタンスが見えてくるように、対立によってさらに深い立場が現われてくると考えられる。これが「实在の分化発展」の意味である。

西田によれば、主観と客観との区別も何ら絶対的なものではなく、实在の自己展開の様式である。すなわち、主観というのは「統一の方面」であり、客観は「統一せらるる方面」であるとされる。この簡素な西田の説明は森野氏によって以下のようにパラフレーズされた。实在は自分自身を形作っていくパワーを持っている。そのパワーが出てくる側が主観であり、パワーが出ていく側が客観である。「意識現象」としての实在にはつねに行き先がある。「自己」はあらかじめ存在している

実体のように捉えられがちだが、それはあくまでも一定の行き先に向かっていく作用にすぎない。そして、働きかけられるものが対象とされる。しかし、

作用とそれを受けるものとの関係は決して固定的なものではない。私が私を振り返るとき、振り返られた私は対象化された過去の私として私の中に沈殿しつつ、さらにそこにその事態を振り返る純粋な作用としての私が出現するように、作用は対象を次々と包含することによって、その都度新しい作用として現われてくる。西田が、真の自己を「無限の統一者」と呼ぶのはこの意味においてである。このように森野氏は説明した。

森野氏の解説を受けるかたちで、竹花は第四段落以降の議論について簡単に解説した。〈能動—所動〉、〈無意識—意識〉、〈本体—現象〉の区別をどのように考えるのが後半部の問いであるが、西田の主張は〈主観—客観〉の関係を述べる際に用いた枠組みに依拠するものとなっている。すなわち、「意識現象」の統一的な側面が、それぞれ「能動」「無意識」「本体」にあたり、被統一的側面がそれぞれ「所動」「意識」「現象」に相当すると考えられている。この場合も重要なのは、統一的方向と被統一的方向が固定的な関係ではないという点である。西田においては、統一作用によって包含され

たものが、新たな統一作用による反省の対象となることにより、再び統一と被統一という対立を生み出すという無限のプロセスとして考えられている。竹花の説明でもこの点が強調された。

さて、コロナ禍の中でオンラインで行われた今回の大会の最初のプログラムが『善の研究』講読であり、不慣れなツールを用いたディスカッションでは様々なトラブルが予想されたが、特に問題も生じることなく、予想以上に参加者からは多くの質問がなされた。実際の質疑応答は前半部と後半部でそれぞれ行われたが、ここでは論点ごとに参加者とのやり取りをごく簡単に紹介することにしよう。

「意識現象」を唯一の实在と考える西田の立場はやはり独我論ではないのか、個人を超える視点を発見した倉田百三の感激にもかわからずやはり西田の議論においても独我論の問題は解決されてはいないのではないのか、このような質問が参加者から出された。このような疑問に対し、森野氏は「自己」の独立存在を否定する西田の一元論的立場の意味を深く理解する必要があると返答した。竹花から

の応答も基本的に同趣旨のもので、西田の「意識現象」という言い方は独我論を連想するものであるけれども、それが「私」の立ち現れる以前の意識である以上、世界を「私」の所有物と見なすような独我論とはやはり一線を画すものであることが述べられた。西田の一元論に関して、それはプロティノスの一元論とどのように異なるのかという疑問も出された。これに対し森野氏は、後者の一元論が知性を本質とするのに対して、西田の立場は経験を本質とするものであって、その意味で両者は大きく異なると説明した。

諸々の区別や差異を「实在の分化発展」として理解する今回の箇所为中心的立場についても、それがヘーゲルの立場とどのように異なるのかという質問がなされた。これに関して竹花からは、实在の自己展開の議論についてはヘーゲルから多大な示唆を受けているものの、「真の統一者作用用者^{そのもの}はいつも無意識である」と明確に語り、統一作用を意識下に常に隠れた働きとみなす点において、意識の展開を通覧する視点を保持するヘーゲルとはやはり異なるのではないかという返答がなされ

た。

た。

その他、平和活動という問題を『善の研究』の視点からどのように捉えることができるのかという問いや、西田と道元との関係をめぐる疑問などが出され、オンラインという形式にもかかわらず質疑応答は活発にされた。

『善の研究』講読は、西田初学者に向けて丁寧な説明を行うと同時に、参加者との活発な議論を目的とするものである。説明が丁寧すぎると質疑応答の時間が短くなり、説明を簡略化しすぎると内容の理解が不十分なため質問が出にくくなるというジレンマを常に抱えている講読会であるが、今回は森野氏の丁

長明エクササイズ

エッセイ

今年度から大学で講師として教えることとなった。

少し話が前後するが、昨年度の話から始めたい。昨年度は博士論文を書き終わり、大学院を卒業した次の年だった。卒業したとはいえ、それですぐに大学で教えられるわけでもない。お

寧な解説と竹花担当時の十分な議論の時間とが、期せずして絶妙なバランスをとった会であったと思われる。ただ、反省点としては担当者相互の事前の打ち合わせが十分でなかったために、講読会が前半と後半とで分断されてしまいかたちとなった点が挙げられる。担当者が二人設定されている利点を十分に活かして、参加者の質問に対して担当者がそれぞれの立場から答え、場合によっては担当者同士が議論しても良いのではないかとされる。次年度以降は、担当者同士の連携をより密にして会を運営していくことが望まれる。

(竹花洋佑)

森野雄介

金を稼がなければどうにもならないので、しばらく契約社員として働くこととなった。インタビューや会議を文字に起こすことを業務とする会社だった。私は元来きわめてポンコツ度が高い人間である。そのため長年、サラリーマンとして働ける

はずがないと思っていた。とはいえ、実際に働いてみると、案外普通に働けてしまった。このことは自分にとっては大きな驚きだった。会社の方々も優しく、仕事の業務も面白かった。インタビューを文字に起こしながら、エクリチュールとパロールの本性の差異などを感じたりもした。医療やポランティアなど、自分の知らない分野の話聞くことに新鮮さもあった。そのようなわけで、仕事内容や環境について何も不満がなかった。ただ、どことなく物足りなさを感じていた。何に物足りなさを感じたのかといえば、それは明白で、哲学を学ぶ時間が十分に取れないということだった。契約社員として働いている間、繰り返し「もつと哲学を学びたい」と思った。大学院での環境には恵まれていたと思う。だが、率直に言えば、博士論文を書くまでに研究者であることを嫌になったことは何度もあった。そういうわけで、博士論文を書き終わったときも、これでいいキリがついたからもう辞めてしまってもいいなと思った。後はちびちびと、自分のペースで気ままに読んでいけばいいのだ、と。

だが、実際に働いてみると、どうも哲学は自分にとって思ったよりも大きなものであるらしいことに気づいた。研究者としての自分の力量には我ながらクエスチョンマークがつく。だが、業績や能力はさておき、自分の人生に哲学は必要になってしまっていたらしかった。哲学書を読むことでしか味わうことのできない楽しさがある。哲学や研究が嫌になってしまっていた時期は、「誰々はどうか考えているか」であるとか、「自分には能力がない」であるとか、「人類への知的貢献」が先んじてしまつて、この楽しさにすっかりと腰を据えることができていなかったように思う。そういうわけで、結果的に学部生の頃に漠然と感じていたような「自分は哲学が好きなのだ」という気持ちや再確認してから大学で教えることになった。このことは、とても自分にとって良いことだったと思う。

そういうわけで今年度に入り、実際に教えることとなった。自分はきわめてポンコツであることに加えて、大勢の前で話すことがきわめて嫌いだ。なので、最初は対面授業が恐ろしくてたまらなかった。想像の三〇

倍恐ろしかった。だが、気づけばいつのまにか何となく慣れてしまった。特に何も不安に思うことなく、気ままに授業をするようになっていた。

今年度は疫病がどんどん広がっていった年でもあった。最初は遠隔課題を出すだけだったので、のんびりとしていた。だが、対面授業が再開されてからは、きわめて忙しくなった。授業は二つのグループに分けて、対面と遠隔を入れ替わりで行うこととなった。そのため、一気に二つ分の授業を準備しなくてはならなくなったのだ。そこから先は「ばたばたしていた」という記憶しかない。気づけば、今年度の授業スケジュールが全て終わっていた。トラブルもなく何とか走りきれたことには、とてもほっとしている。

哲学や思想に関わる授業をしていて、たびたび「自分は何を教えているのだろうか」という疑問に駆られることがあった。自分としては、哲学は世の役に立つべきであるという主張に懐疑的だ。「人はパンのみに生きるにあらず」ではないが、人間の生は有用性だけで形作られてはいないと考えるためだ。とりわけ、人間も含めて、あらゆるも

のが有用性の領域に押し込められそうである現状ではより一層そう思う。あるいは「私たちの知は役に立つ」と大手を振って歩くよりも、ろくに物の言えない「役に立たない」側に身を置きながら、哲学をしたいと思う。自分がポンコツであることの矜持なのだろうか。

哲学はとても面白い。だが、何が面白いのだろうか。自分でもあまりよくわからない。自身の研究としてはそれでいいのかもしれない。だが、学生に對して、自分は何を伝えるべきなのだろうか。それは学生に何の意味があるのだろうか。「哲学は意味があります。役に立ちます」と言ってしまう、自分の本心に嘘をつくことになる。とはいえ、「哲学には意味はありませんから」と言ってしまう、「じゃあ意味のないことを何で教えるのか」という話になる。

昨年か今年かに流行したあるラップソングに「教師、漫才師、医師、弁護士、／師と仰がれし者、皆ベテン師」という歌詞がある。このフレーズがやたらと頭を過ぎった一年だった。自分が出ていることはベテンなのではないか。もちろん、教えるに

あたって「ベテン師」にならないよう、できるだけ努力はしたつもりだと言いつつもおきいたが。

それにしても、なかなか暗い世相となってしまう。疫病が世界的に流行し、それによって経済も大きな痛手を受けた。そして、それにより今も実際に苦しんでいる方たちがいる。あるいは、疫病の流行によって不安定になった秩序を取り戻そうとする欲求なのか、陰謀論をネットのあちらこちらで見かけるようになった。陰謀論的な思考法は人間の意識の本性に基づいているのだと思うようにもなった。自分には恐ろしいと思えないような差別的な言説が「当然の権利だ」、「事実を言っ

て何が悪い」と主張されているのを目の当たりにもした。やはり、恐ろしいのは人間であるのだろうか。そして、このような状況で、私たちは何を、どのようにに思考していくべきなのだろうか。

れるからだ。

昨年の年末に、何となく鴨長明の『方丈記』の現代語訳を読んでいた。平安の町に死体が散乱し腐臭がするような疫病の蔓延と飢饉を経験した長明の記述は生々しく感じられた。そういう、世界も他人も自分も、もともと思いのままになるものでもなかったとも感じた。そして、そのような経験をした長明のあり方にある種のプラクティスを見た。「自分の身は、自分の心の苦しみを知っているから、苦しいときは休み、元気であれば、使う。使うといつても、度を越すことはない。疲れていて休んだとしても、それで腹を立てるといふことはない。あるいは、『琵琶をうまくは弾けはしないけれど、だれかに聞かせて喜んでもらおうというのではない。一人で弾き、一人で歌い、自分の気持ちを豊かにしようというだけのことだ』。

長らく、西田幾多郎の「斯の如き世に何を楽んで生るか。呼吸するも一の快樂なり」という言葉をただの強がり、格好つけだと思っていた。とはいえ、彼も希望を抱くことのできない時代に生きていたのだろうかと思つたのは、つい最近のことだ。

疫病の流行によって不安定になった秩序を取り戻そうとする欲求を、自分の心の内にも感じることがある。シモーヌ・ヴェイユの『重力と恩寵』の言葉を借りれば、おそらく、自分の中にも「自分が苦しんでいるのと同じ苦しみを、他人がまったくそのままに味わっているのを見たいという欲望」や「自分の外に、苦しみをまき散らさず、傾向」があるのだと思う。

だが、そうするのはなく、長明エクササイズ。このような状況であるからこそ、日常の中にある、普段は見過ごしてしまいうような、一つ一つの行為が持つ楽しさを享受していきたい。怒ることや嘆くことに何も問題はない。そうあってしかるべきだ。だが、怒ることや嘆くことのみが正当な態度とされるのなら、自分は見過ぎしがちな日常のあれこれの一つ一つ楽しんでいきたいと思う。そこから、世界も他人も自分も思いのままにならないなかで、そのようにあるからこそ、自分はどうかあるべきなのかを考えていきたい。自分の信念によって他者を裁くことからはなく、ありのままを見ることから吟味と対話を始めたい。

誰にとっても、争いや諍い、不安や悩みのない、平和な世であってほしいと切に思う。そして、それは実際には不可能なことだろう。そのために自分のできることなど、ほとんど何もなに等しいのだから。

ただ、自分を大事にしてほしいと思う。誰にあっても。陰謀論しか見えなくなり、実際に生きる人々の暮らしが見えなくなることには悲しいことだ。傷つき、苦しみが、もがく人たちの姿が、その心が、感情が見えなくなってしまうならば、なおのことそうだ。でき合いの一時の流行のもとに人を傷つけながら何も感じなくなってしまうことは、ま

ずはその人にとって悲しむべきことのように思う。だが、そう言っただけで何になるのだろうか。ただ、格好をつけただけなのだろうか。おそらくは長明のように、自分の姿こそを映し、見るべきなのだろう。「静かな暁に、この道理を考え続け、自分で自分の心に問いかけた。世間から遠ざかって山林に分け入る暮らしを選んだのは、仏道修行のためだったはずだ、と。それなのにお前は、姿勢好だけは聖人だが、心は濁りに染まっている」……。だが、自分の心に

そんなふう問い掛けても、心は何も答えなかった。ただ、舌を動かして、阿弥陀仏の名を二度、三度、唱えただけだった。

注

- 1 R指定、DJ松永、あ、オオサカ dreamin' night、ヒブノシスマイク/どついたれ本舗、キングレコード、二〇一九
- 2 鴨長明 蜂飼耳訳『方丈記』、光文社、二〇一八
- 3 シモーヌ・ヴェイユ 田辺保訳『重力と恩寵』、筑摩書房、一九九五

理事会報告

二〇一九年秋の理事会

二〇一九年十一月三日(日)に、立教大学にて理事会を開催した。概要は以下の通り。

(一) 第十八回年次大会

二〇二〇年七月二十四日(金・祝)、二十五日(土)に、石川県西田幾多郎記念哲学館にて開催されることが確認された。講演会は、関根清三氏、西平直氏の二氏に講師を依頼することが承認された。シンポジウムのテーマは「霊性」とされ、提題者を白井雅人氏、飯島孝良氏、司会を大熊玄氏に依頼することが承認された。

(二) 『西田哲学学会年報』への特

集論文カテゴリーの新設

編集委員長より『年報』誌面の充実のため「特集論文」カテゴリーの新設の提案がなされ、これまでの「シンポジウム」カテゴリーを取りやめ、特集テーマを前年度シンポジウムのテーマと合わせることで、新設が承認された。また、シンポジウム提題者以外への執筆依頼は編集委員長に一任することが決められた。

(三) 理事選挙の被選挙権者の年齢制限

世代交代を促進するため、理事選挙の被選挙権者に年齢制限を設けることが提案され、審議の結果、「選挙が行われる会計年度中に七〇歳を超える理事は五名を超えて選出されてはならない」という案が提示され、総会にて提案・審議することが決定された。

(四) 故・上田閑照特別会員からの寄付

二〇一九年六月に逝去された上田閑照特別会員より二十万円の寄付が遺言によって申し出があったことが報告され、審議の結果、寄付を受け入れること、受け入れ方法の調査を会長と事務局に一任すること、運用方法については継続審議とすること

が決定された。

(五) 事務局報告

事務局より、入退会および種別変更についての報告が行われ、承認された。また事務局より、総会で承認された予算通り、かほく市に例年どおり事務局委託費として十万円の寄付を行うことが報告された。

(六) 編集委員会からの報告

『西田哲学学会年報』および『西田哲学学会会報』の編集・発行の行程の変更が報告された。『年報』の外部査読についての協力依頼がされた。また『年報』の電子化の進捗が報告された。

(七) その他、継続審議事項

幹事の任期、幹事会の規模・権限について審議が行われ、継続審議となった。

年次大会において、複数人数での発表形式「パネルディスカッション」を新設することが提案され、審議の結果、公募や運営の仕方、『年報』との関わりなど検討すべき点は多く、継続審議となった。

二〇二〇年秋の理事会

二〇二〇年十一月八日(日)に、オンライン会議システムにて理事会を開催した。概要は以下の通り。

(一) 事務局報告

入退会および種別変更についての報告が行われ、承認された。二〇二二年度の理事選挙の予定について報告され、承認された。四月末に選挙に関する文書が郵送され、五月末の締切りにて郵送によって選挙を実施する予定が説明された。また、前年度よりの審議事項であった理事の年齢制限の適用も承認された。

(二) 会計

二〇一九年度の会計報告が行われた。前年度からの主な変更点として、収入では故・上田閑照氏からの寄付、支出では『西田哲学学会年報』電子化経費、『会報』増頁などが報告され、承認された。

二〇二〇年度の会計予算が説明された。例年との主な変更点として、収入ではコロナ禍による年次大会の延期およびオンライン開催による収入・支出の増減が説明され、承認された。

(三) 編集委員会からの報告

『西田哲学学会年報』第十七号発行の報告がされた。第十八号については、一月末まで論文の応募が可能、シンポジウムも一月末がメ契となっているなど、例年とは異なる編集日程となっ

ていることが報告された。

『西田哲学学会年報』電子化の進捗状況が報告され、また、既に四号から十六号までが公開され、一、二、三号の電子化も進んでおり、近く公開可能であることが報告された。

(四) 年次大会について

第十八回年次大会が、オンラインで開催されることが確認され、その注意点・留意点などが説明された。

二〇二二年度における第十九回年次大会について、京都大学を第一候補の開催地として、二〇二一年七月二十四日(土)、二十五日(日)に開催される

ことが提案され、承認された。留意点として、通常の対面式での大会実施を原則としつつも、コロナの状況次第では、オンライン開催、ハイブリッド開催の可能性があることも確認された。

プログラムについて検討され、講演会は、二〇二〇年度に講演依頼をしていた西平直氏、関根清三氏の二氏に再び依頼することが承認された。

シンポジウムは、テーマを「生死しよじとケアと西田哲学」とし、提題者を丹木博一氏、浅見洋氏、司会を石井砂母亜氏に依頼することが承認された。

(五) 上田閑照基金(仮)

故・上田閑照氏より西田哲学会に寄付された二十万円につき、仮称「上田閑照基金」を設置し、理事から委員を選任し、運用規約を作成し、通常会計とは異なる専用口座を設けて別会計として運用していくことが承認された。年度内の委員人選は会長に一任し、次年度の選挙において選出された理事によって改めて人選が行われること、これまでの「西田哲学研究基金」との関係性については今後の委員によって検討し理事会にて決められることが承認された。

(六) その他

これまで夏(年次大会時)と秋に年二回開催されていた理事会のうち、今後、秋の理事会をオンライン開催とすることが提案され、承認された。

長谷正當氏が、特別会員へと推薦され、承認された。

年次大会における「パネルディスカッション」新設については、引き続き継続審議となった。

A会員が何らかの文章を投稿する場を、『会報』や新設Web雑誌などに設けることが提案され、継続審議となった。

(大熊 玄)

上田閑照基金について

本会初代会長を務められた上田閑照先生は、二〇一九年六月二十八日にご逝去されましたが、先生と眞而子奥様のご遺志を受け、先生の遺産管理者であられる甥御様・榎本慈弘氏より、二〇一九年十一月、本会宛てにご遺贈金として二十万円が寄付されました。

先生はご生前、今日見られるような国内外における西田哲学研究の充実と普及に多大なご功績を残されたのみならず、本会の創設と発展にも大変ご尽力されました。そして今また、西田哲学に対する強いご熱意と本会への深い愛情を示して下さいました。

先生の学恩を忘れることなく、また奥様との深いご遺志を全会員で共有するため、「西田哲学会上田閑照基金」を立ち上げ、会のために活用させていただきますことになりました。去るオンライン年次大会の総会で報告させていただきましたように、基金運営委員会を設置して管理運用してまいりますので、皆様には、ご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

(秋富克哉)

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」
京都の西田哲学研究会は、昨年三月初めに予定されていた研究会が中止になって以来、現在休会中です。ただ、西田哲学会を含めさまざまな学会や研究会がオンラインで実施されている現状を踏まえ、何よりも遠方からの参加が可能なオンラインの特性を活かし、いずれオンライン開催の実施に向けて検討したいと考えています。今しばらくお待ち下さいますよう、お願いいたします。

本件についてのお問い合わせは、秋富(akiomi@kit.ac.jp)までお寄せ下さい。

(秋富克哉)

・山口西田読書会「於山口」
山口西田読書会では令和三年一月三十一日現在で原則毎週土曜日開講の西田読書会(佐野担当)が二六二回、木曜日開講のニーチェ読書会(岡村康夫担当)が一四四回を数えます。参加者は大学生、研究者、一般の方まで十名前後。西田では『働くものから見るものへ』後編、ニーチェでは『偶像の黄昏』を精読中。コロナ禍で四月から五月

は担当者による解釈案をもとに電子対話に切り替えました。対話の様子は「読書会だより」に掲載。卒業修了祝を兼ねた発表会「饗宴」は令和二年に引き続き本年も中止。現在ニーチェはズームにての開催、西田は対面での開催です。

(佐野之人)

読書会開催概要

日時 毎週土曜日
一時三十分～
三時四十五分

※はじめの十五分は掃除。一時四十五分より読書会場所
〒七五三〇〇三四
山口市下野小路四五番地
西田幾多郎旧宅

連絡先

(メール) info@yamaguchi-nishida.org
(電話) (〇八三)九二二一〇七五三

寸心荘読書会「於鎌倉」

平成十八年の開講以来十余年の間、ほぼ隔月で開催されてきた「寸心荘読書会」は、昨年春の緊急事態宣言下での学習院大学全校外施設活動休止により、休会を余儀なくされている。今

春より少人数で、短時間の見学に限り活動を再開することになった寸心荘ではあるが、参加者に高齢者が多く、密集空間で長時間の朗読、議論を行う読書会の再開の時期は現在なお未定である。西田が日常を過ごした座敷に参加者たちの声が聞かれるのはいつになるのであるうか。咲き初めた庭園の紅梅に、既に故人となられた旧制高校世代の参加者の、目を輝かし、音吐朗々と『善の研究』の一節を朗読された様子など偲びながら、再開の春を待つ日々が続いている。

(世話人・講師 岡野浩・岡野利津子 gghokano@w2dion.ne.jp)

・寸心読書会「於石川県西田幾多郎記念哲学館」

寸心読書会は一九四七年に始まった哲学館で最も伝統のある事業です。年間十回程の予定で『善の研究』などの西田や京都学派の思想家の著作を読んでいます。二〇二一年は新型コロナウイルスの影響でずれ込む可能性があります。例年三月頃に年間の受講を受け付けています。講読範囲、受講方法、受講料等、詳細につきましては、哲

学館ウェブサイトを等をご確認ください。

(中嶋優太)

石川県西田幾多郎記念 哲学館だより

哲学館では西田幾多郎の資料の調査・研究と公開の事業を行っています。

【西田幾多郎全集別巻の刊行】

二〇一五年に発見された五〇冊の未公開ノートのうち、西田が京都大学赴任直後に行った倫理学と宗教学の講義ノートを哲学館で翻刻し、昨年九月に西田

幾多郎全集別巻として岩波書店から刊行しました。別巻は哲学館でもご購入いただけます。

【西田幾多郎ノート類デジタルアーカイブの公開】

右の新発見のノートを中心に西田の直筆ノートの画像を三月にウェブ上で「西田幾多郎ノート類デジタルアーカイブ」として公開します(QRコード参照)。



全集別巻として刊行された



ノートも西田がどのように書いたか、直筆を確認することができます。その他、西田が帝大で授業を受けた際のノートや、フッサール、T・H・グリーン、W・ヴェント等の著作を読んだ読書ノートなど、西田哲学、日本哲学の舞台裏を伺わせる資料があります。是非、研究にご活用ください。

(中嶋優太)

「年次大会」における 口頭発表の応募について

第十九回年次大会(二〇二一年七月開催)の口頭発表者(日本語または英語)を公募します。発表希望者は、二〇二一年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

『西田哲学学会年報』掲載 論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たく

編集後記

今号掲載の報告記事が伝える通り、西田哲学学会第十八回年次大会は、日程が七月の予定であったものが十二月となり、形態も対面オンライン形態ではなくオンライン形態となつての開催でした。『西田哲学学会報』の記事締切日もこれに連動して移動させたため、今号は例年よりも半年遅

さんの応募をお待ちしております。なお次の第十九号掲載分は、編集の都合上、令和三(二〇二二)年十月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。応募にあたっては、ホームページに掲載の投稿規程と執筆要項をご確認ください。



れでの発行となりました。オンラインという形態で学術大会を実施することは西田哲学学会にとって初めてのことでしたが、この経験はこれからの学会運営に向けての貴重な財産となったと思います。次にはオンラインとオンラインの両方の利点が組み合わされた大会運営の可能性が検討されることでしょう。

(編集委員長 水野友晴)